

令和七年秋季号

現存の優品

日本刀



八十八番 耕冲



100

現存の優品 目次

脇差	無銘	来国真(鎌倉末期—京都)	3
刀	無銘	伝高包(鎌倉初期 備前)	4
短刀	来国(以下切)	俊(鎌倉後期—京都)	5
刀	無銘	則長(鎌倉末期—大和)	6
脇差	無銘	来国光(鎌倉末期—京都)	8
刀	和州高市郡藤原朝臣大喜太夫清長		9
短刀	恐八切手見鍛冶下手也(室町後期—大和)		10
短刀	冬広作(室町後期—若狭)		11
刀	相州住康春(室町後期—相模)		12
刀	飛騨守藤原氏房作(江戸初期—尾張)		13
刀	紀伊国康広(江戸前期—紀伊)		14
脇差	和泉守藤原兼重(江戸前期—江戸)		15
脇差	但馬国法城寺橋正則(江戸前期—江戸)		16
脇差	大法師法橋来栄泉		17
脇差	和泉守藤原来金道(江戸前期—京都)		18
脇差	《金象嵌》三ツ胴落 天和元年○月吉日		19
脇差	《菊紋》播磨守藤原忠国(三代)		20
刀	《枝牡丹紋》以南蛮鉄作之(江戸中期—肥前)		21
刀	川部儀八郎藤原正秀(花押・刻印)		22
刀	文化十二年二月吉祥日(江戸後期—江戸)		23
刀	石室藤原一精鍛作之		24
刀	明治四年二月日(幕末—東京)		25
鐔	無銘	埋忠 棚蔓木図(江戸初期)	26
鐔	無銘	甲冑師 二挺鎌透し(江戸初期)	27
鐔	《大小》以形又七 俊行 霞桜枯木象嵌図(現代)		28
鐔	無銘	京透し 桐紋繋ぎ透し(室町後期)	29
鐔	無銘	平田就門 秋草図(江戸中期)	30
鐔	無銘	赤坂 歳寒二雅透し(江戸中期)	31
小柄	紋栄乘 光孝(花押) 鈴虫図(江戸初期)		32
小柄	紋頭乘 光孝(花押) 織女図(江戸前期)		33
二処	(小柄・目貫) 無銘	堀江興成	34
目貫	松竹鶴亀図 金無垢地(江戸中—後期)		35
目貫	一・乗(割側銘) 百合図(幕末)		36
目貫	無銘	光乘 波に麒麟図(桃山)	37
目貫	無銘	古美濃 海老図(桃山)	38
共柄小刀	於越後国義光作		39
	八十一叟仙琇彫之 見返り龍図(現代)		40

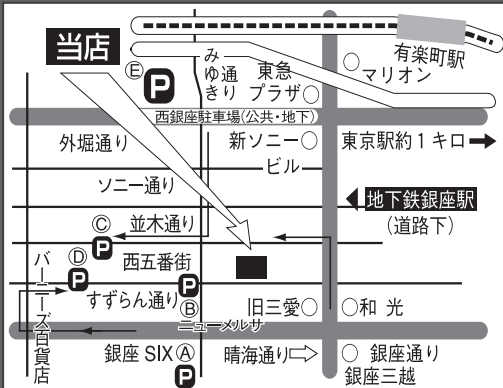
●価格は説明文の末尾にあります

表紙題字：「日本刀」 東大寺長老 故・清水公照師筆
表紙：武具図 八十六翁耕冲(上田耕冲。幕末～明治。四条円山派)

銀座・刀剣柴田 秋季即売会

令和7年(2025年)
10月3日(金) 4日(土)・6日(月)
●5日(日曜日)はお休みさせていただきます。

●当店への交通は
地下鉄銀座駅から徒歩1分、
JR有楽町駅から徒歩8分。
東京駅からでもタクシー15分、
基本料金で来ます。



【会期中の営業時間】 朝10時～夜6時

*お車では、上記5カ所の駐車場が便利です (AからE)

〒104-0061 東京都中央区銀座5-6-9 ☎03(3573)2801
ホームページ: <http://www.tokensibata.co.jp> FAX 03(3573)2804

ご送金のご案内

- ①三井住友銀行／銀座支店 普通預金 7038644 (株)刀剣柴田
(送金手数料、お引きください)
- ②郵便局／振替口座 00190—7—52891 刀剣柴田
(必要でしたら振替用紙、ご請求ください)

ご挨拶

暑い暑い35度を毎日超える夏もやっと過ぎました。秋となり、銀座を歩く人たちにもホッとした風情が窺えます。街を歩くと銀座の各処で行われていたビル工事もそろそろ終盤で、新しいビルがどんどん姿を現し、景色は一変し、目を瞠るようです。当社近くの銀座四六丁目でも、ティファニー、ロエベ、カルティエなど海外のブランド店が、水色・茶草色などきれいなビルで大きく進出、その勢いは銀座を含む観光地を闊歩する外人観光客の皆さんに通じるものがあります。その点、数寄屋橋角の新・ソニービルは地味ですね。コンクリート打ちっ放しビルなので、くすんだ感じで国力の差を感じさせるようで悲しいです。そういえば前述のブランド店のビルは、もとは皆、都市銀行が入っていたビルで、本当に一等地です。

銀座が明るくなっていることは事実です。どうぞ遊びがてら当店の即売にもお寄りいただき、ご注文でもいただけますようお願いいたします。

令和七年十月 柴田光隆

脇差

無銘

来国真らいくにまね

(鎌倉末期—京都)

約七〇〇年前

鑄造り 刃長一尺七寸二分(52・1cm) 反り四分弱

元巾八分九厘 先巾五分八厘 重ね二分強

大きく磨上げて脇差の長さになっており、身巾細

身で重ね頃合い、反り浅めで、表裏に棒樋を掻き通

すもコリつとした手重りがある。地鉄、板目に柃が

かった鍛えも交え、地沸こまかくつき、淡く地映りが立つ。刃文、小沸出来の直ぐ調に、足がよく入って小互ノ目がかかり、小乱れも交え、葉も入り、砂流しわずかにかかる。帽子、焼き深く小丸。

無銘であるが先般の審査で来国真との鑑定がついた。『古今銘尽』では来国真について、来国俊の子

で来国光の弟、来倫国の兄と記している。在銘の

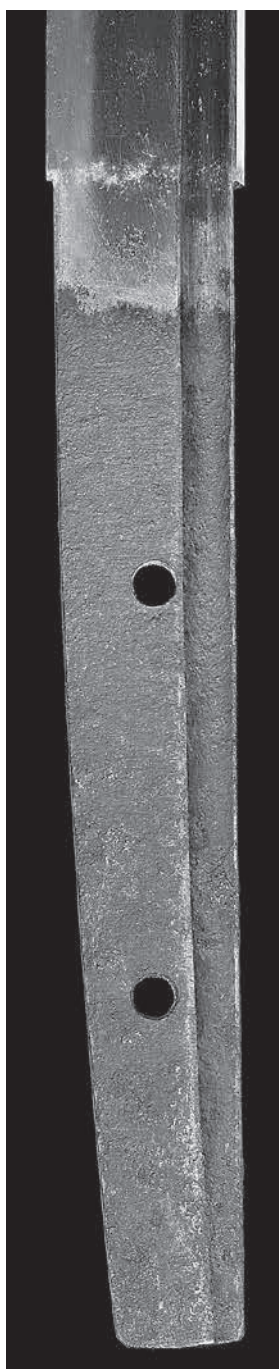
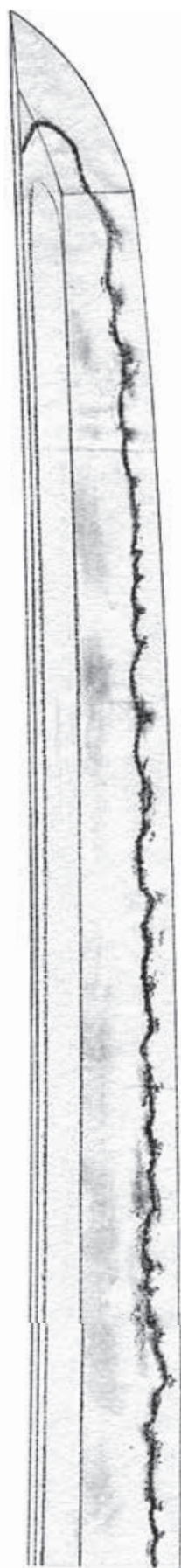
作例としては神宮徴古館の太刀のほか二、三が知ら

れ、無銘の場合は、来国光に似て作位的に少し譲るものを国真と極めた例が多い。本作は、地鉄の板目に沸映りが立ち、刃文は小沸出来の直調小乱れを焼くなど地刃に来派の特色がよく示されており、一門の中では国真の極めが最も妥当と思われるのであろう。

金着一重鍔 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

一二〇(120)万円



全身を除いて原寸



刀 無銘

伝高包たかかね

(建保—備前)

鎌倉初期 約八一〇年前

鑄造り 刃長二尺二寸四分強 (67・95cm) 反り八分

元巾九分 先巾五分五厘 重ね一分八厘

大磨上げ無銘の刀で、身巾狭めに腰反り高く、小切先の整った姿。地鉄、小板目よく錬れ、小奎目交じり、地沸ついで映り立つ。刃文、焼き巾の広い小

沸づいた直ぐ調に小互ノ目・小丁子を交えて匂い深く、小足・葉が盛んに入る。上部の物打ち辺は匂い縮まった太直刃となる。帽子、直ぐに先き小丸。

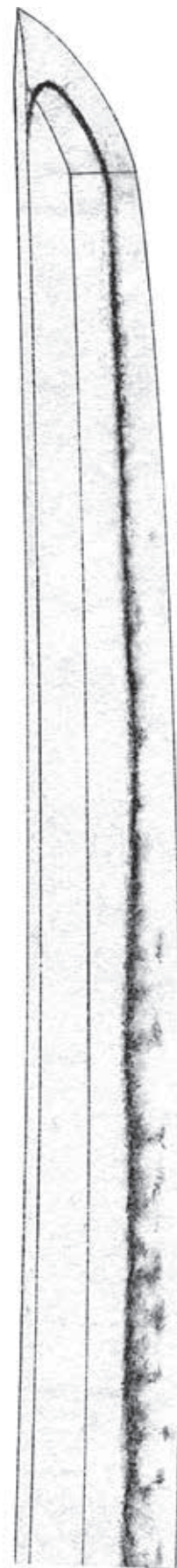
古備前派の高包と伝えられる品である。古備前とは平安末期より鎌倉中期にかけての備前の刀工で、一文字派勃興以前の作を称する。同派では友成と正恒が最も有名で、他の包平・吉包・助包・景安・信房等が一群をなす。高包はそこにあつて高名であるとはいえないが、東京・赤坂の日枝神社所蔵の在

銘の一振が重要文化財に指定されており、本作もその作品を鑑みての認定と思われる。思えば鎌倉初期とは源頼朝・義経などの英雄の活躍したところで、気の遠くなるようなはるか昔である。拵も添えられており、いろいろな金具を取り合わせて作られており、蝶を幾羽も黒く形抜いた青貝鞘がよい。

金着一重鍔 拵付(白鞘もあり)

重要刀剣(昭和40年・第13回)

八〇〇(800)万円



全身を除いて原寸



腰刻み黒塗青貝微塵蝶文形抜き鞘打刀拵

〈頭〉黒塗り木製 鼻線形〈縁〉波濤図 赤銅波地 鋤出彫 金色絵〈目貫〉布袋に鳥図 赤銅地 容彫 金色絵
〈鐔〉鶴亀透し 鉄地 丸形 肉彫透し 金布目象嵌〈鯉口・小尻〉波龍図 赤銅波地 鋤出彫 金色絵〈柄〉白鮫着黒糸巻(拵の総長 九四・五cm)



短刀 来国(以下切) 俊

(正応—京都)

鎌倉後期 約七三五年前

平造り 刃長九寸四分(28・5cm) 先き内反り
元巾八寸弱 先巾五分強 重ね二分強



元来は大ぶりの短刀であったが、今は2cmほど磨り上げて銘が中心尻に切れて残る。重ねは厚く三つ棟で、身巾はやや細くなり先うつむき加減でスルドい感じとなる。彫物は表に素剣、裏に細い腰樋。地鉄、小板目に柁ころがあつてつむも、大きく肌の立った大肌を交えて流れ、地沸ついて沸映りたつ。刃文、直ぐ調小のたれで小沸がつき、小足・葉が入

り、物打ち辺は焼きが少し甘く匂い深となる。帽子、直ぐ互ノ目から尖り気味に小丸、返り長い。

来国俊は天下の名工で、時代も鎌倉後期と古く京物らしい作風を展開している。長いものは優雅な太刀姿、短刀においては古来より新藤五国光・栗田口吉光とともに三名工の一人として知られる。本短刀は時代の研ぎ減りがあり、また少し磨上げられて銘が半分切れているが、来国俊あたりであると無銘でも重宝視されるので、これだけはつきりと残るは貴重である。拵は新作であるが黒塗鞘の合口拵が添えられた。金具はよいものを使っている。

金着二重釦 拵付(白鞘もあり)
特別保存刀剣鑑定書付
二四〇(240)万円



黒呂塗鞘短刀合口拵（新作）〈目貫〉鳳凰図 赤銅地 容彫 金色絵 〈小柄〉柳川直春（花押） 九曜紋に桜紋図 総金色絵七々子地 高彫 裏・喃金
 〈小刀〉銘・尾崎源五右衛門助隆 〈角所〉黒漆塗研出し 〈柄〉白出し鮫（拵の総長 四五cm）



刀 無銘 則長^{のりなが}

（鎌倉末期―大和）約七〇〇年前

鑄造り 刃長二尺二寸一分（66・9cm）反り五分弱
 元巾一寸 先巾七分 重ね二分二厘

大磨り上げながらほぼ定寸、身巾・反り頃合いに、重ね厚めで中切先の姿に表裏に棒樋を掻き流す。地鉄、こまかい柃目肌がゆつたりと流れてつみ、地沸厚く美しくつく。刃文、浅いのたれに互ノ目を交え、よく沸びき匂い深く、ほつれ・湯走り・金筋かかる。帽子、直ぐに小丸で掃きかける。

大和五派の中の尻懸派は則長を祖として栄えた。

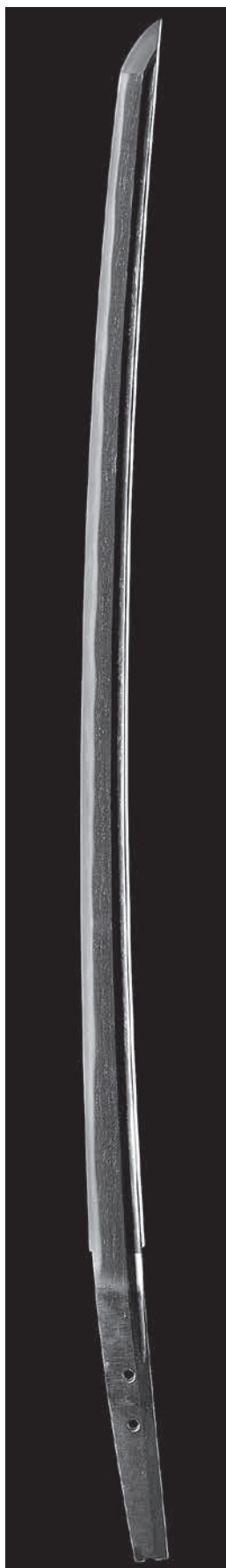
同銘で続き、初代は鎌倉後期ごろ、南北朝期が盛期で、下って室町期に入るものまで見る。本作は無銘・則長と個銘で重刀に極められており、時代を初代と見たのであろう。作風は柃目調の鍛えに、刃文は浅いのたれに互ノ目が目立ち、刃中の働き盛んのところに則長の特徴を見せている。加えて健全であって、大事に伝えられてきたことに間違いなく、拵は肥後拵で総刻みの鮫鞘が落ち着いた色合いを示し、縁頭・目貫などの金具にも一級品を使っている。なお尻懸とは本来地名で、祖の則長の銘にも「大和国尻懸住則長作」とあるから明白である。幕末の古剣書では、その場所を、現在の奈良県天理市岸田

町尻懸（旧・山辺郡岸田村）としている。ほかに奈良市の北の郊外だとする説もあるが、大和の古社寺のうち、現在、法隆寺に則長の短刀が20余振あり、談山神社には則長の短刀が45振と太刀が3振ある。よって距離的に旧・山辺郡岸田村の方が両寺に近いので、同派の居住地はその市場あたりの可能性が高いとみられる。則長らはその地に住んだため、尻懸派と呼ばれて派名となった。

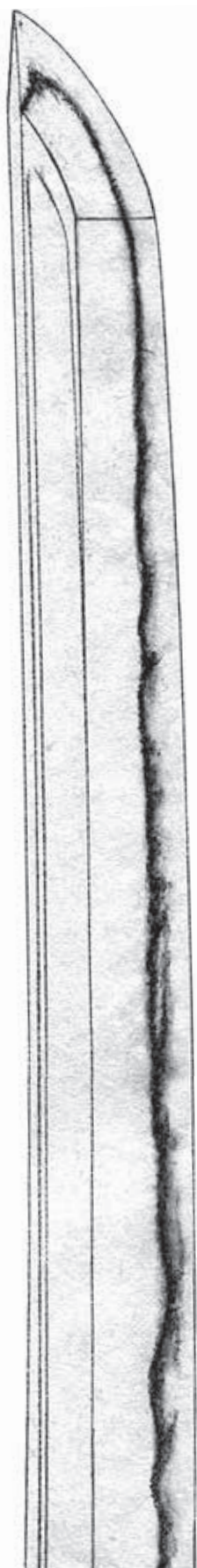
重要刀剣（昭和49年・第22回）但し証明書
 金着二重鑑 拵付（白鞘もあり） 三二〇(320)万円



黒漆絶二分刻み研出し鮫鞘打刀拵 (肥後拵) (縁頭) 後藤光高 (花押) 獅子図 赤銅石目地 高彫 金色絵 (目貫) 獅子図 金無垢地 容彫
 (鐺) 法螺貝・桜花・梅花・菊花陰透し 鉄磨地 八ツ木瓜形 透し彫 線彫 (柄) 白鮫着薄茶燻 (くすべ) 革 (拵の総長 95 cm)



全身を
除いて
原寸



刀 無銘 来国光^{らいくにみつ}

(嘉暦—京都)

鎌倉末期 約七〇〇年前

鑄造り 刃長二尺三寸七分強 (71・8cm) 反り六

分半 元巾一寸強 先巾七分 重ね二分四厘

大磨上げながら長さ十分、身巾広めで反りつき、

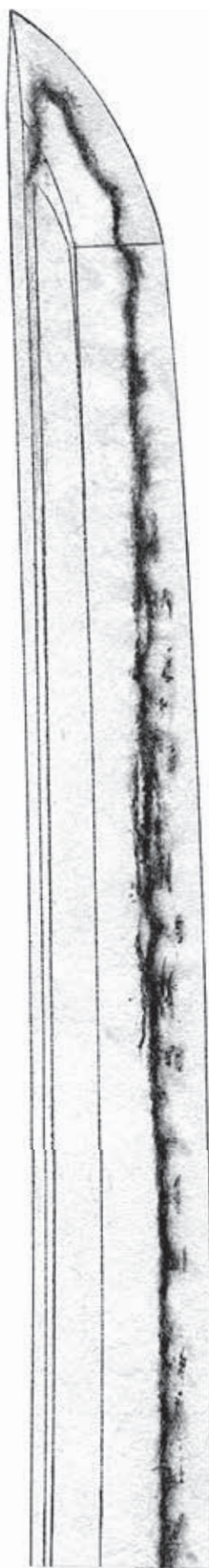
重ね厚く重量があり、表裏に太い棒樋を掻き流し

堂々とした姿。地鉄、小板目よく鍛れてつみ、こまかな地景入り冴える。刃文、広直ぐ調で刃縁に小沸がよくつき、足・葉よく入り、物打ち刃は沸づいて二重刃などかかり、明るく冴える。帽子、焼き深く、直ぐに先き尖り気味に小丸。

来国光は来の嫡流・来国俊の子と伝え、鎌倉後期から南北朝前期にかけて活躍した。京を代表する来派の中にあつて作品が最も多く現存し、太刀・短刀

ともに上手で、短刀には乱れ出来も見かけるが、太刀の作は本刀に見るようにほとんど直刃出来となる。本作はがっちりした体配に棒樋が入って美形で、刃文は明るく足・葉の働き盛んである。健全で元から先元まで刃巾変わらず、来国光極めの優品である。

重要刀剣(令和6年・第70回)
金着二重鑑 白鞘 七〇〇(700)万円



全身を除いて原寸

脇差

和州高市郡藤原朝臣大喜市太夫清長きよなが

恐八切手見三鍛冶下手也

(天文—大和) 室町後期 約四八〇年前

鑄造り(表・平造り(裏) 刃長一尺二寸四分(37・

5 cm) 反り三分 元巾一寸五厘 先巾九分 重ね

二分二厘



身巾広く切先が延びた脇差で、重ね厚めで先反りつき、重量がある。表に棒樋と添え樋、裏の腰元に龍の櫃内浮彫があり。地鉄、板目で刃寄り流れ、肌立ち気味で黒い鉄色交じり、地沸がつく。刃文、大のたれに互ノ目を交えて沸つき、刃中ほつれや細かい砂流しかかる。帽子、直ぐ調でのたれ、先き掃きかける。

清長は系統不明であるが銘に高市郡と住処すまかが入り、奈良市のずつと南である。明日香村があり、その高松塚古墳や巨大な石舞台古墳(蘇我馬子の墓)は教科書でもよく拝見した。添え銘が貴重で、この銘が『日本刀銘鑑』にそのまま所載されて時代は天文。

知られた作であったが長いこと出てこず、今般久しぶりに見つかって日刀保の審査にも出し、室町後期として特別保存証がついた。添え銘は謙虚なのか自信があるというか、いどむような文章で他に見ない。現存する作例は稀であるが、本作は姿よく出来よく珍品の一振である。

特別保存刀剣鑑定書付

金着一重鍔 白鞘 一四〇(140)万円



短刀

ふゆひろ
冬広作

(天文―若狭)

室町後期 約四九〇年前

平造り 刃長七寸八分強(23・8cm) 反りなし
元巾七分五厘 先巾五分六厘 重ね二分七厘

頃合いの長さ・身巾の短刀で、重ねが厚い鎧通しの造り込みでガツシリとする。地鉄、板目に流れを交え、幾分黒味がかかり、肌立ちところで地沸がつく。刃文、互ノ目に小乱れや尖り風を交え、小沸つき、刃中に金筋風かかり、末相州風の趣がある。帽子、焼き深く乱れ込み、先き小丸で長く返る。冬広は若狭の名門。祖は室町中期の人で、相州二

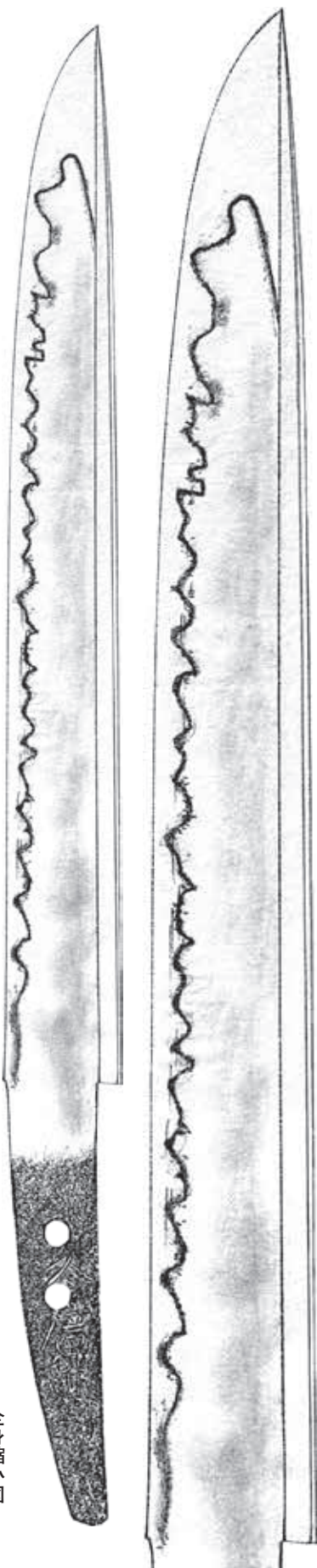
代広次の子といわれ、若狭國小浜に移住してきた。代々同銘が同地につづき、室町後期から末期の冬広一門の活躍は華々しい。一般に伯耆の広賀とともに、末相州系の出店のごとき鍛冶一族といわれ、本作はその典型でかつ出色の出来である。姿もよく、棟を三つ棟にするのは相州伝の表示であろう。拵は黒塗総刻みの凝った合口拵。目貫の壺笠桐は高級品で拵の高位を示しているが、小柄・拵が抜かれてしまっているのは誠に残念である。

金着二重鍔 拵付(白鞘もあり)

特別貴重刀剣認定書付

七五(75)万円

原寸



全身縮小図



総刻み黒呂塗合口拵 黒漆塗角 〈目貫〉壺笠桐
図 丸形 赤銅七々子地 高彫 金色絵 〈小柄・拵〉欠く(拵の総長 三九cm)
返角(かえりづの)まで刻みにしている

短刀

相州住康春

(天文―相模)

室町後期 約四九〇年前

平造り 刃長七寸強 (21・3 cm) 反り無し 元巾

七分強 先巾四分五厘 重ね一分七厘

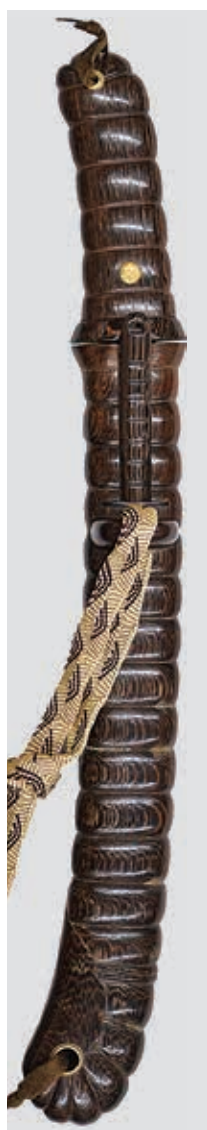
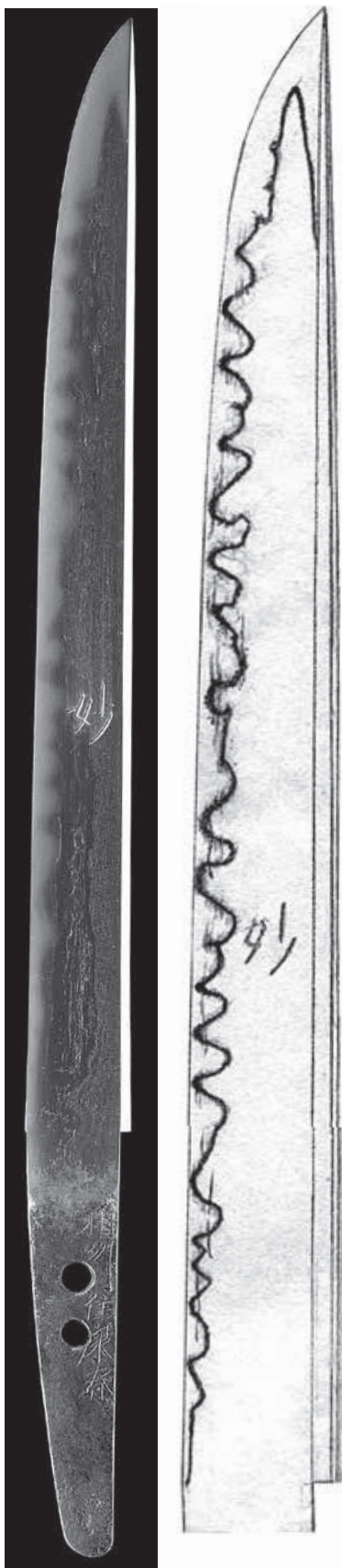
小ぶりの無反りの短刀で、姿よく重ねやや薄く三つ棟となり、表に妙、裏に法の文字を切分けて刻す



る。地鉄、小板目に流れ入り、肌立ちどころ交じるも地沸つき白気風の映り立つ。刃文、互ノ目丁子に小沸がつき、刃中に沸筋風の金筋かかる。帽子、乱れから直ぐとなり先き尖って掃きかけ、返り長い。鎌倉が衰亡して新たに小田原に北条氏が興り、この地に相当数の刀工が居住するようになった。これらを小田原相州と呼び、康春もその一人である。康春は島田義助の門人で初銘・泰春。小田原に移住し

て北条氏康より康の字を授けられ康春に改めたと伝えられ、網広・総宗等と共に末相州を代表する一人である。小田原相州物の現存刀は末備前・末関に比べるにいたって少ない。また末相州一派には伝統の秀れた彫刻の作刀が多くあり、本作表裏の妙・法の文字彫は日蓮宗のお題目、南無妙法蓮華經の略である。それらを鑑み前のお持ち主が目を書き添えを注文した。銘木を削りだし海老鞘拵とし、小柄・笄まで同作とする。よくこの堅木を削り上げここまでツヤを出したもので初見である。

拵付 (白鞘は葆光 神津伯の鞘書あり)
保存刀剣鑑定書付 金着一重鍔
九五(95)万円



茶堅木総刻み短刀海老鞘拵 (縁頭・小柄・笄・栗形・裏瓦を茶色銘木で作る) (目釘) 表裏の頭が金色絵のねじ込み式 (小刀) 銀無垢地 (拵の総長 四一・五 cm)

刀 飛騨守藤原氏房作

(慶長―尾張)

江戸初期 約四二〇年前

鑄造り 刃長二尺二寸六分 (68・3 cm) 反り五分

五厘 元巾一寸二厘 先巾八分 重ね二分六厘

切先が大きく延び、身巾広めに反り頃合いの慶長新刀姿で、重ねも厚く手応えあり。表裏に棒樋を掻き通して見ばえよい。地鉄、小板目に疵ごころが交

じつて鍊れ、表の中ほど下は大板目がかり、地沸がよくつく。刃文、ゆったりとしたのたれ刃に、互ノ目や足が入り、小沸ついて匂い深く、処々に荒目の沸がからんでほつれ、二重刃・砂流しかかる。帽子、焼き深く、直ぐに先き小丸で棟焼きにつながる。

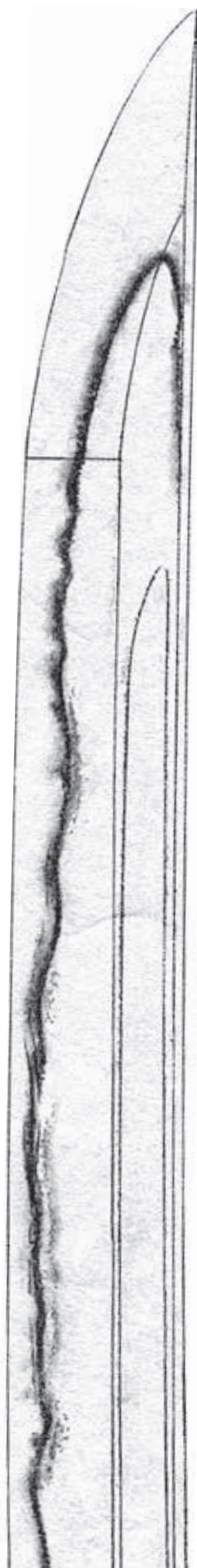
飛騨守氏房は若狭守氏房の嫡男。天正5年には織田信孝(信長の三男)の側小姓として出仕していたが、11年に信孝が自害したため浪人となり、父について鍛刀を始めた。二年後に父が没、初代・伯耆守

信高に師事する。20年に政常・信高とともに清洲の領主である関白秀次の斡旋によって三名同時に受領した。のち慶長15年に名古屋城が完成するとともに名古屋に移住し、65歳まで鍛刀した。本作は、得意の大のたれに互ノ目を焼いた出来で姿は力強く、いかにも江戸初期の雰囲気である。

素銅無垢一重鑑 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

二二〇万円



全身を除いて原寸

刀 紀伊国康広

(万治―紀伊)

江戸前期 約三六五年前

鑄造り 刃長二尺三寸一分(70cm) 反り七分弱

元巾一寸三厘 先巾七分弱 重ね二分四厘

頃合いの長さに先巾やや狭まり、反り深く、重ね厚く中切先で、表に力強いごく深い彫り口の真の玉

追い龍、裏に梵字と爪付の護摩箸を彫る。地鉄、板目よく錬れて柃を交え、肌立ちこころに地沸ついて淡い映りたつ。刃文、焼巾の広い丁子に互ノ目・小乱れを連らね、物打ち上は直ぐ丁子風となり、小沸ついて足・葉さかんに入り華やか。帽子、直ぐ調に小互ノ目がかり先き小丸。

り興り、また多くの紀州石堂派の刀工たちも来住した。作風はお家芸の備前伝で、中でも康広と多々良長幸が名高い。本作は備中守を受領する以前、紀州在住の初期作で、地刃に力があって華やか。特に研減りのない玉追い龍の彫物は迫力あって見事である。

特別保存刀剣鑑定書付

金着二重釦 白鞘 一六五(165)万円



彫原寸

全身を除いて原寸



刀 和泉守藤原兼重わのいけ

(正保—江戸)

江戸前期 約三八〇年前

鑄造り 刃長二尺三寸五分 (71・2cm) 反り五分

元巾一寸二厘 先巾六分五厘 重ね二分五厘

長さ定寸に、身巾は尋常で重ね厚くつき、反り頃合いに中切先。地鉄、小板目がつみ、地景入って、

地沸が厚くつく。刃文、焼き高めに、上半は浅い互ノ目に小のたれが交じり、下半は互ノ目に高低がつき、総体に匂い深く、刃縁に小沸がよくつき、こまかい砂流しかかって、短い足が入る。帽子、焼き深く、直ぐに小丸で、返り長く焼き下げる。

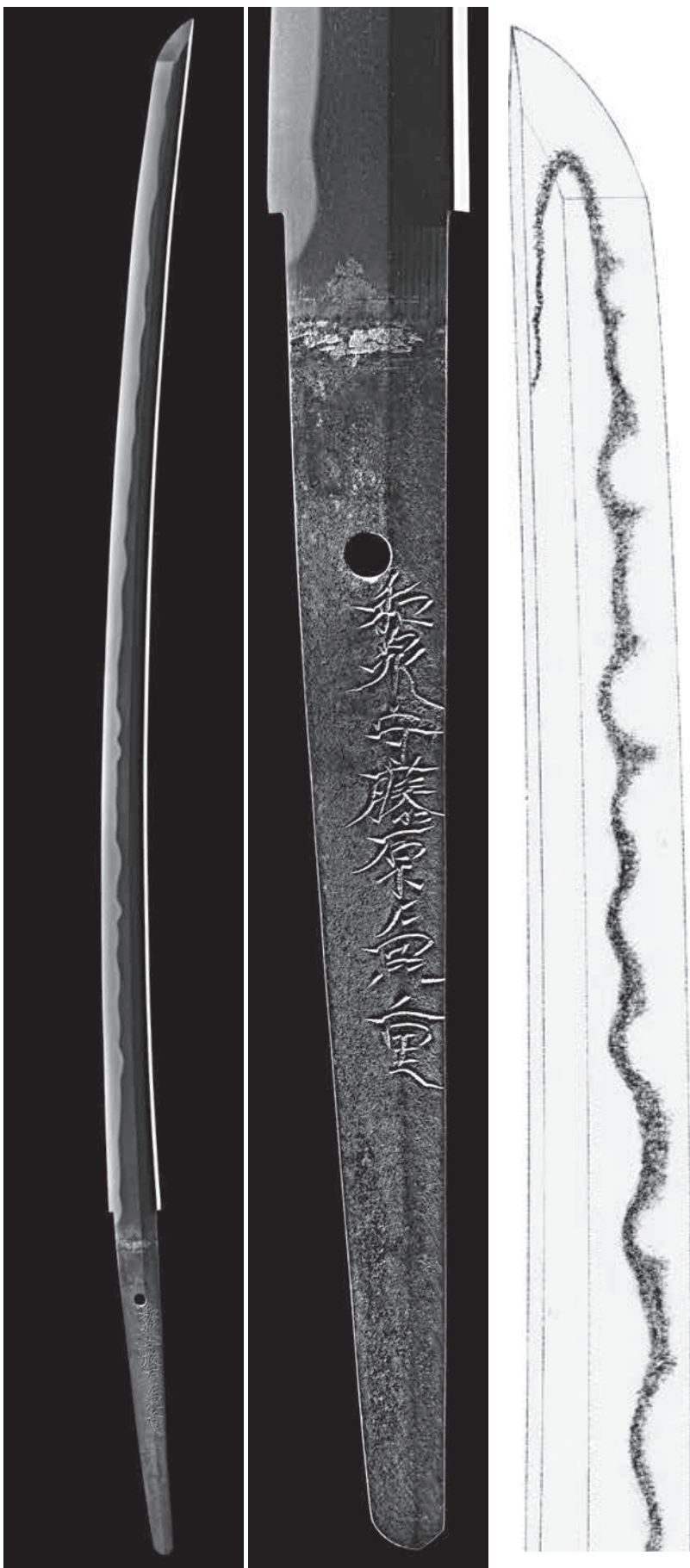
和泉守兼重は生国越前、はじめ鍛冶であったが刀工に転じ、寛永の初年、江戸に出て和泉守を受領し、藤堂家に抱えられる。強い鍛えに、沸・匂いの

深い刃文を焼き、その出来ばえから虎徹の師匠と考えられている。兼重二代の上総介兼重の作はまみ見かけるが、初代・和泉守兼重は少ない。本作は見栄えのよい刀で、出来もたいへんよく典型の作で、また上等の馬金具の拵がつけられている。

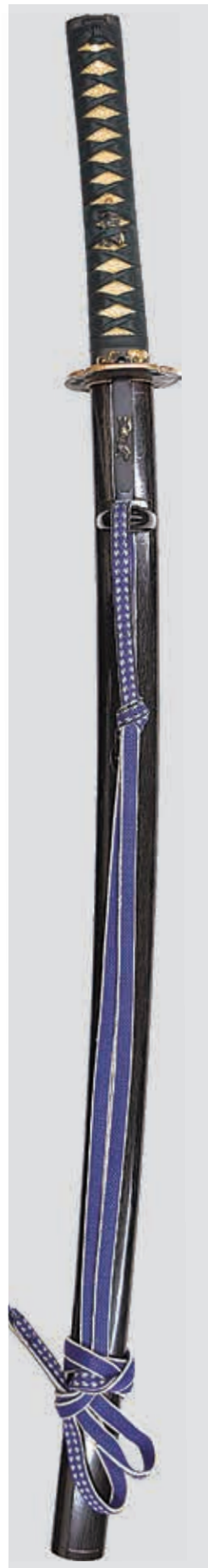
赤銅着一重鍔 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付

二五〇(250)万円



黒塗猫掻き風線入り鞘打刀拵（縁頭）英致（花押）群馬図 赤銅七々子地 高彫 金・素銅・赤銅色絵（目貫）飾り馬図 赤銅地 容彫 金色絵
 （鐔）杢目肌図 鉄地 木瓜形 小透し 金覆輪（小柄・笄）飾り馬図 赤銅七々子地 高彫 金色絵 裏・磨地（柄）白鯨着濃緑糸巻（拵の総長 九八cm）



脇差 但馬国法城寺橋正則

（寛文―江戸）

江戸前期 約三六〇年前

鑄造り 刃長一尺七寸弱（51・4cm）反り三分三厘
 元巾一寸 先巾六分七厘 重ね二分三厘

頃合いの長さに重ね厚く、切先詰りごろで元先に巾差がつき、反り浅めの寛文新刀体配。地鉄、小

板目が鍛られてよくつみ、地沸こまかくついて冴えて美しい肌合い。刃文、焼き高く、小沸出来のたれ調に足が入り、沸・匂い深く、処々沸が強めにつき、沸筋よくかかる。帽子、直ぐに小丸。

法城寺正則は但馬国の出身で、初代正弘の門人。

貞宗三哲の一人に数えられる但馬国出身の法城寺国光の末裔という近江守正弘を頭領とする江戸法城寺派は、寛文ごろの江戸鍛冶の中でも最も多くの門弟

・門流を誇ったようである。門人では貞国・正照・吉次・国正らが名高い。今回の正則は作品の少ない方であるが、平成十年には刀が一振、重刀に指定された。技量の高さは推し量ることができ、本作もカチツとした出来ばえの会心作である。拵は黒呂鞘の尋常なもので赤銅七々子地の金具がつく。

銀無垢二重釧 拵付（白鞘もあり）

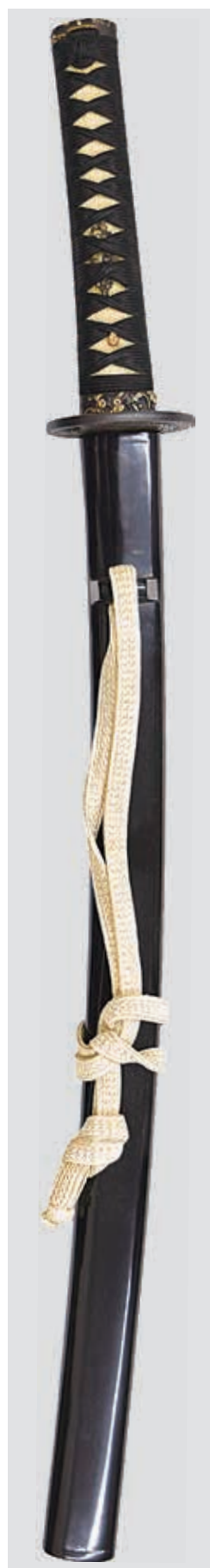
特別保存刀剣鑑定書付 八〇(80)万円



●次頁に続く



黒呂塗鞘脇差拵（縁頭）秋草図 赤銅七々子地 高彫 金色絵（目貫）紅葉狩り図 赤銅地 容彫 金色絵（鐔）長州萩住岡田政富作 蘇鉄図 鉄地
丸形 肉彫透し（小柄）枝菊図 赤銅七々子地 高彫 金色絵（柄）白鯨着黒糸巻（拵の総長 七六・五cm）



刀 〔枝菊紋〕 大法師法橋来栄泉

和泉守藤原来金道

〔金象嵌〕

三ツ胴落

天和元年〇月吉日

（天和—京都）

江戸前期
三四年前

鑄造り 刃長二尺三寸一分（69・9cm）反り四分強
元巾一寸四厘 先巾七分 重ね二分二厘
長さ定寸に身巾頃合い、反り浅く元先に巾差のや

やついた寛文体配で、表に腰樋と添樋を丈比べに、裏に梵字と護摩箸を刻してスッキリとしている。地鉄、板目に流れを交えて地沸がつき、刃寄りに柃目が顕著に現れる。刃文、焼きの高い互ノ目乱れで、箱がかる刃なども交えて沸・匂い深く、足入り、砂流し・沸筋さかんにかかる。帽子、直ぐに浅く小丸。京の三品一派のうち金道という、すぐに長男の伊賀守金道系が思い浮かぶが、次男の来金道系も腕

がよい。本作の来栄泉は二代目で、和泉守来金道が三代目となる。銘の上部に上手な枝菊紋を切るのが特徴で本作の中心もとてもきれい。このような切り銘は幾振か見かけ、中でも本作は「三ツ胴落」の金象嵌截断銘が入り、年紀もあつてまことに好ましい。

保存刀剣鑑定書付

甲種特別貴重刀剣認定証付（昭和55年）
赤銅着一重鍔 白鞘 一七〇（170）万円



三ツ胴落

天和元年九月吉日

大正師法橋来栄
我余守藤原来金道



脇差

〔菊紋〕播磨守藤原忠国（三代）

たたくに

〔枝牡丹紋〕以南蛮鉄作之

（元禄—肥前）

江戸中期 約三三〇年前

鑄造り 刃長一尺七寸九分強（54・2cm）反り五分
元巾一寸五厘 先巾八分 重ね二分五厘

頃よい長さの脇差で、身巾広く重ね厚く、先反り
ついて中切先。表裏に丸留めの棒樋を刻するも重量
はドッシリと重い。地鉄、小板目よく鍊れ、黒ずん

だ鉄色が沈みこむように交わり、地沸厚くつく。刃
文、互ノ目・丁子・矢筈などの乱れ刃で、小沸づき
処々荒目の沸ついて一部地にこぼれ、刃中沸筋かか
る。帽子、乱れ込み、先き掃きかけて返り長い。

脇肥前・忠国の三代目の作。忠国家は肥前刀の中
でも正広・行広家とともに傍肥前を代表しているが、
初代の忠国が肥前鍋島家の支藩である小城鍋島家に
抱えられたことから、小城藩工を代々つとめている
（小城は佐賀市の西北部）。三代忠国は二代忠国の
長男で元禄8年に播磨守を受領した。この工をふく

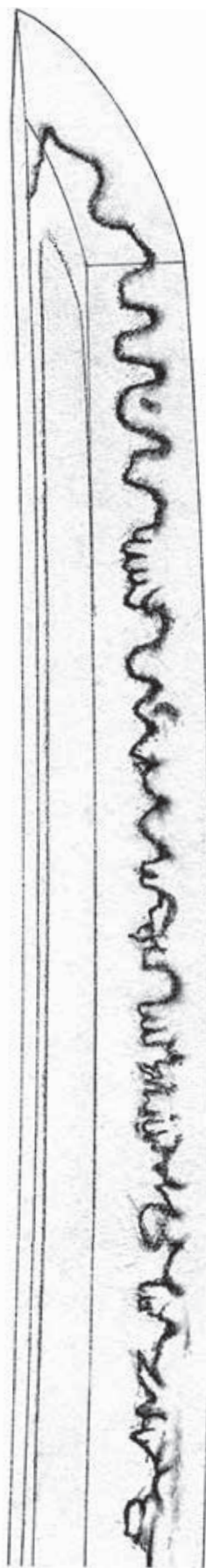
め、忠国家は小城町の一角に屋敷を与えられ幕末
まで続いた。また中心に菊紋と抱え枝牡丹紋をきる
のは各代忠国にまま見るところで、本作の中心も二
つの紋を表裏に切り分けてとてもきれい。忠国らし
く刃文があらわれ、全体に覇気ある出来である。

上蓋金着・下蓋素銅二重鐶 白鞘
特別保存刀剣鑑定書付

佐藤寒山博士鞘書あり

八〇(80)万円

●次頁に続く



全身を除いて原寸



刀

川部儀八郎藤原正秀まさひで（花押）〈刻印〉

文化十二年二月吉祥日

（江戸後期—江戸）二一〇年前

鎬造り 刃長二尺二寸一分半（67・1cm）反り五分

五厘 元巾九分九厘 先巾六分弱 重ね二分三厘

先が狭まるやや優しい感じの刀姿。地鉄、水心子晩年の鏡鉄と呼ばれる無地風の鍛えで、地沸ついて

よくつむ。刃文、小沸出来の直刃、締まってわずかに小足入り、処々のたれて、上の方は沸が強く大粒となつて刃縁につく。帽子、直ぐに小丸。

新々刀の開祖にして最上作の水心子正秀、66歳の作である。文化・文政のころの水心子は復古論を實踐して、古備前風の焼刃の低い作刀が多く、姿も比較的優しいものが多くなっている。使いやすさと刀が折れないことを第一義においたためである。先般、刀剣博物館で「江戸三作展」があり、拝見したが水

心子の作品の体配は皆このような先き狭まるものであった。文政八年に76歳で大往生している。拵は朱黒混りの浅い横刻みの鞘に牡丹獅子の鉄金具主体で華やかめのものである。

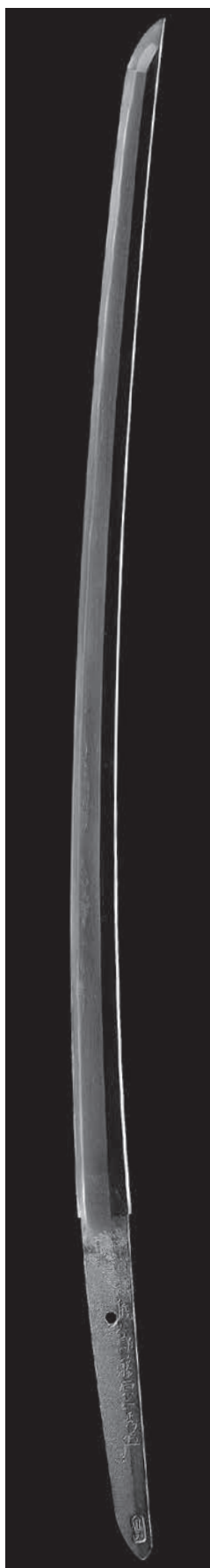
特別保存刀剣鑑定書付

佐藤寒山博士鞘書あり

金着一重鍔 拵付（白鞘もあり）

二二〇(220)万円





朱黒塗横刻み鞘打刀拵

（縁頭）牡丹図 鉄地 赤銅高彫（目貫）龍図 赤銅地 容彫 金色絵
（鐔）牡丹獅子図 鉄地 木瓜形 真鍮・赤銅据文 高彫 金色絵（小尻）柴図 赤銅象嵌 鉄地（柄）白鯨着黒糸巻（拵の総長 一〇〇cm）



刀 石堂藤原は一精鍛作之

明治四年二月日

（幕末—東京）一五四年前

冠落し造り 刃長二尺五寸二分（76・3cm）反り六分
元巾一寸一分 先巾九分強 重ね二分三厘

長寸の冠落し造りの刀で、身巾広く重ね厚め、先反り深くつき、切先大きく延びて力強い。表裏の上部を削ぎ、下半に薙刀樋と添樋を掻き通して美しい。地鉄、小板目よく鍛えてつみ、地沸厚くついて精美。

刃文、沸づいた丁子に互ノ目を交え、匂い深く足がさかんに入る。帽子、互ノ目から先き失り風に返る。

一は長運斎綱俊の甥で生国米沢。江戸石堂家の養子となつて七代目是一になる。作風は沸出来の丁子乱れを得意とし、幕府の抱え工にも召され直胤・清磨など没後の実力者。新政府になると明治元年に行政官付きの刀鍛冶、翌年に東京府付き刀鍛冶を命じられたが、それは間もなく廃止され、廃刀令（明治3年と9年）以後は芝新門前町に住み小刀や鉈を作った。本作は最初の廃刀令が出されたのが3年12

月であるので、その声を聞いた翌年間もなくの作。

一が思いの丈を込めたような畢生の作である。明治18年没。拵も添えられており、菊桐紋金具に朱塗鞘のシツカリしたもの。華やかで中の大切先の刀に似合っている。

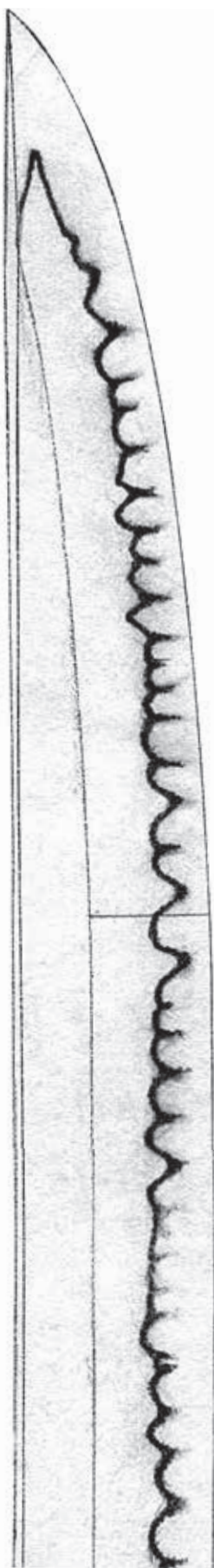
金鍍金一重鍮 拵付（白鞘もあり）

佐藤寒山博士鞘書あり

『新々刀大鑑』所載

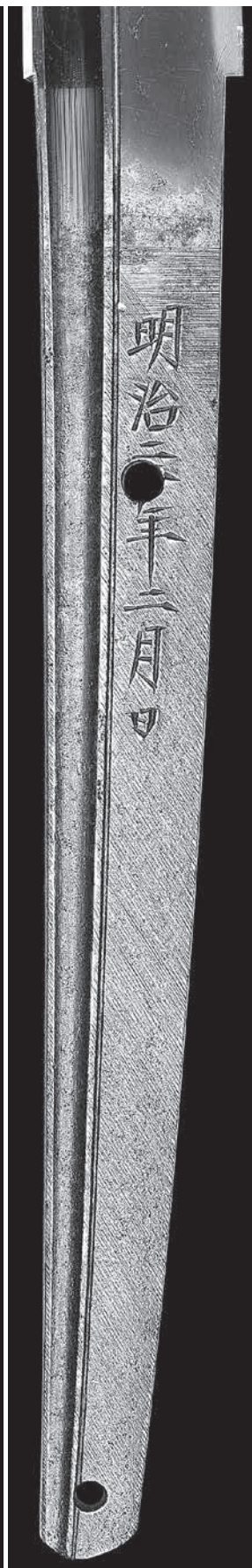
特別保存刀剣鑑定書付

二三〇(230)万円





朱（銀混り）塗鞘打刀拵（縁頭）桐紋散し図 赤銅荒石目地 高彫 金色絵（目貫）神獸図 赤銅地 容彫
 （鐔）菊桐紋散し図 赤銅七々子地 長丸形 高彫 金色絵 耳・金覆輪（鞘口・小尻）横鑑掛け 金色絵地（柄）白鯨着黒糸巻（拵の総長 一〇七cm）





鐔 無銘 埋忠^{うめただ}

棚蔓木^{たなづき}図 真鍮磨地 お多福形 平象嵌^{ひな} 捻り返し耳
少し波打つ真鍮地に溜^{たまり}し込みの描画のような赤銅
平象嵌で、垂れ下がる蔓と葡萄の葉を黒々と描き、
葉脈に短く金線象嵌を入れる。裏は三出複葉と棚木
を同様に赤銅平象嵌。

埋忠派は、元来、足利將軍家の御用を勤めた金工
師で、桃山時代の埋忠明寿を代表とする。京都西陣
を処点に製作し、後藤家と並ぶ名流である。両家は
小道具製作のほかに、貨幣に関する仕事や、刀の工
作(磨上げ・象嵌など)の任務を与えられ、別格の家
格であった。小道具においても明寿は鐔こそ作るが
目貫・小柄・筭は製作せず、それらは後藤家が担当
両家の間には小道具製作について完全な業務の分担
が確認されていたといい、地がねも後藤は赤銅七々
子地、それに対して埋忠は平地に平象嵌となる。

本作は明寿とはいかぬにしても相当代の上がる埋
忠の作で、この地がねの風合いのよさ、また平象嵌
の意匠など他の追随を許さぬものがある。江戸初期
◆縦七二・五mm 横六七・五mm 厚さ二mm

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 三八(38)万円



鐔 無銘 甲冑師

二挺鎌^{しんれやかり}透し 鉄時雨^{てつしめ}鑢地 丸形 陰透し 耳・打返し
枯れた鉄味の薄手の鐔で、地に浅く縦鑢を入れ、
耳は小気味よく打返す。透しの二挺の鎌は配置よく、
クッキリと際立ち、今にも通じる意匠である。

連綿と甲冑造りを生業^{なりわい}にしてきた甲冑工も、室町
中期から後期にもなるとかたわら鐔も製作し、江戸
期に入るとその数は増えてくる。作は鉄味よく、シ
ンプルな意匠は奥深く味わい深いものである。本作
は甲冑師鐔の中にあっても際立つ図柄といえ、また
長い間に持ち主たちが少しずつ手を加え、小柄孔は
鉛で埋め、中心孔の内側には淡い素銅の責金を入れ
るなど、味わい深さが増している。江戸初期。

◆縦七七mm 横七六・三mm 厚さ二mm

特別保存刀装具鑑定書付

佐藤寒山博士箱書あり(昭和45年)

上製落し箱入り 二〇(20)万円



大小鐺 以形又七 俊行^{としゆき}

霞桜枯木象嵌図 鉄磨地 菊花形 金枯木象嵌 陰透し 猪目透し 角耳

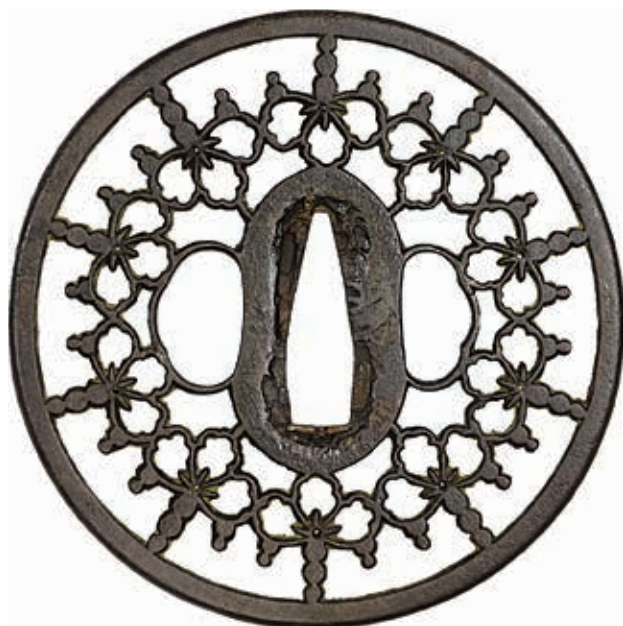
黒々としたツヤのある鉄磨地を菊花形に形取り、四方に猪目を小さく、また中側に桜花を透し、中には金点象嵌を入れる。周囲に霞を糸透しし、中に金の縄目象嵌を丸くあしらひ、耳際には得意の枯木象嵌を厚く金布目象嵌する。切羽台から耳にかけての傾斜や、桜花の透し際の肉取りなど、細部まで行き届いた丁寧な仕事ぶりである。

玉岡俊行師は昭和24年、愛媛県内子町の生まれ。本業は大工であったが、鐺製作に興味をもち、九州・延岡の肥後流の佐々木恒治師に入門する。その卓越した技量は平成九年の「新作名刀展」で最優秀賞を受賞し、以後も受賞を続け、現在は無鑑査として今年も出展している。高度な彫金技術を用いて数々の優品を製作し、鐺製作における伝統技術に新たな創意・工夫を加え、洗練された「糸透かし」技術と他の追隨を許さぬ「布目象嵌」の第一人者として、会得した技術を次代に継承すべく後継者の育成に努め、刀剣文化の振興に貢献している。

本鐺は、肥後鐺の最高峰に君臨した林又七の要素を自家薬籠中とした優品である。現代。

◆大 縦八二・八mm 横七九・六mm 厚さ五・一mm
小 縦七七mm 横七四・六mm 厚さ五・二mm

特製箱入り 六五(65)万円



鐺 無銘 京透し

桐紋繋ぎ透し 鉄地 丸形 透し彫 角耳小肉
黒々とした鉄錆地に桐紋を整然と透し彫する。隣接する桐紋を輪のようにきれいに並べて繋ぎ、それぞれの直立した花序^{かじよ}を鐺耳と繋ぐ。

赤坂・尾張とならび三大透し鐺の一つ・京透し鐺は、室町中期の足利八代將軍義政の好みにより作られたといわれる。優雅で繊細な透し特徴だが、その繋ぎには力強さも感じられる。本鐺は鉄色よく、正統的な透しには格式と普遍的な美しさを感じられる。室町後期。

◆縦八一mm 横八〇・四mm 厚さ三mm

特別保存刀装具鑑定書付
上製箱入り 二〇(20)万円



拡大

小柄 無銘 平田就門なりかど

秋草図 赤銅石目地 金線七宝象嵌 裏・磨地

赤銅石目地に秋海棠の花とススキを金線七宝象嵌する。輪郭とススキを金線で描き、秋海棠の処々に七宝象嵌を施す。秋海棠の茎の赤い節には緋色の七宝、花は緋色と乳白色で濃淡にほかした可憐な花卉を七宝象嵌する。葉はコバルトブルーの鮮やかな七宝で大きくとり、葉縁を黄緑色で色分けし、色彩豊かである。

無銘であるが特別保存証で平田家五代・就門の個銘に極まる。七宝の技術は慶長年間、平田派の祖・平田道仁が朝鮮から製法を伝え、代々將軍家の七宝師として一子相伝で世襲した。就門は享保七年に七宝技術だけではなく、他の彫金も今後は行う許可を得ている。得意とする七宝技術は精巧で、本作の就門極めは何らかの伝来によるものと思われる。江戸中期。

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 五〇(50)万円



鐔 無銘 赤坂

歳寒二雅透し 鉄磨地 丸形 透し彫 毛彫 丸耳
黒々つつやのよい鉄錆地に梅と竹を透し、梅の花びらや竹の葉の葉脈に毛彫を入れる。冬でも青々とした竹と、寒さ厳しい中、一番に開花して新年を寿ぐ梅を描く。

京から江戸の赤坂・溜池あたりに移り住み、尾張鐔の強靱さと京透しの精巧さを自派にとりいれた赤坂鐔。その鉄味は良好で、加えて図柄の構図の良さを確立した。

鐔の上下の透しを菊の花びら、左右を蘭の葉と見立てれば四君子の図柄となる。江戸中期。

◆縦七九・四mm 横七八mm 厚さ四mm

特別保存刀装具鑑定書付

『百鐔』所載 上製箱入り 二五(25)万円



拡大

小柄 紋栄乗 光孝 (花押)

鈴虫図 赤銅七々子地 高彫 毛彫 金色
絵 裏・哺金

赤銅七々子地に三匹の秋の鈴虫を彫る。右に金色絵した鈴虫を高彫、中央と左の二匹は赤銅高彫し翅の羽脈を毛彫する。シンプルであるがピンと伸びた触覚や、しっかり地に着く歩脚など、彫りがこまかく存在感のある小柄である。

栄乗は後藤家五代・徳乗の長男。文禄三年に家督相続して父に従い豊臣家に出仕したが、関ヶ原合戦後は徳川家に遠慮して京都郊外に引退する。元和二年に叔父・長乗の取りなしで徳川秀忠から分銅大判等改め役と彫物役家に任じられるが、翌年の元和三年、江戸にて41歳で客死。天下が信長、秀吉、家康と移り行く時代に、後藤家の再興と伝統を守りぬき、作風は後藤家上六代の一人として端正で高い品性を持つ。本作は栄乗の紋を用い、宗家十三代目・光孝が仕立て直しをして銘を入れたもので、保存よくまことに綺麗である。江戸初期。

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 四〇(40)万円



拡大

小柄 紋頭乗 光孝 (花押)

織女図 赤銅七々子地 高彫 金銀色絵 裏・哺金

目のつんだ赤銅七々子地に織女図を肉取高く、また強い鑿使いで高彫する。織女の顔と手、織っている布を銀色絵し、機織り機の杵木と織女の領巾を金色絵。織女の左手は、縦糸を整える櫛型の箆を持ち、右手は横糸を通した杵を握る。両端に天上を表すように瑞雲を金色絵で高彫する。

後藤頭乗は五代・徳乗の次男。長兄の六代・栄乗没後、子の光重が年少のため後見をかねて七代目を継承する。光重に家督を譲ったのちは加賀前田家の招致で隔年で金沢に出張し、加賀後藤の基礎を作る。頭乗の頃から、後藤家の得意とする龍・虎・獅子など伝統の彫物とともに、時代の嗜好の移り変わりに伴い花鳥・人物図なども彫られるようになる。

この織女図は同工作の素銅地に毛彫の同図もあり、また後藤各工にも多く見られる図である。

裏は上掲の小柄と同様、頭乗による紋を用い、光孝が仕立て直しをして銘を入れている。江戸前期。

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 四〇(40)万円



ふたところ
二処〈小柄・目貫〉無銘 堀江興成 おきなり

目貫・金無垢地 容彫
松竹鶴亀図 小柄・金無垢七々子地 高彫 裏・

時雨鑑

金色鮮やかな金無垢地で、小柄は七々子地に仕立てて松に竹、鶴亀を高彫する。ぶつくらと大きい目貫は松に鶴、竹に蓑亀の組み合わせで容彫する。いずれも不老長寿を祝うめでたい図柄で、すべて金色一色というたいへん豪華な二処である。

無銘ながら堀江興成に極まる。興成は浜野政隨家と大森英昌に学び、30歳を過ぎてから後藤彫に魅了され、後藤系の尾崎直政に学び、現在名作の多くは後藤然としたものが多い。阿波蜂須賀家の抱え工となり、この二処は池田家伝来品で、池田家と蜂須賀家は縁戚関係であった。

現在の金の高騰は知らぬ人がなく、ここで江戸期の金無垢金具を紹介できることはうれしい。重さはもちろん重く、小柄で42グラム、目貫で15グラムあり、最低18金とみても相当の量である。江戸中後期。

特別保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り 一二五(125)万円



拡大

目貫 一・乗 (割側銘)

百合図 赤銅地 容彫 金平象嵌 毛彫

赤銅地にユリの表裏を彫る。ラッパ形の大きく開花した花は鹿の子模様を金平象嵌し、雄蕊の先の丁子形の葯を鑿で細かく彫る。裏目貫も花・葉・茎に虫食いを彫り、両目貫ともに葉脈と花卉の脈を毛彫する。

後藤一乗は寛政三年、京都に生まれる。後藤本家ではないが日夜精進を重ね、後藤家の掉尾を飾る名工となり本邦彫金界に大きく名を成す。一乗細工所を経営し、一琴・一至・一匠など優れた門弟を養成する。余技にも優れ、絵画・俳諧・和歌など当時一流の文化人であったゆえに作風も多様だが、みな相当な水準である。明治維新後も勸業場御用係など活躍する。

小さいながら厚手で黒々とし、鹿の子百合の花を丁寧に描く、写実性に優れた目貫である。幕末。

特別保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り (帙付き) 五〇(50)万円



銘拡大

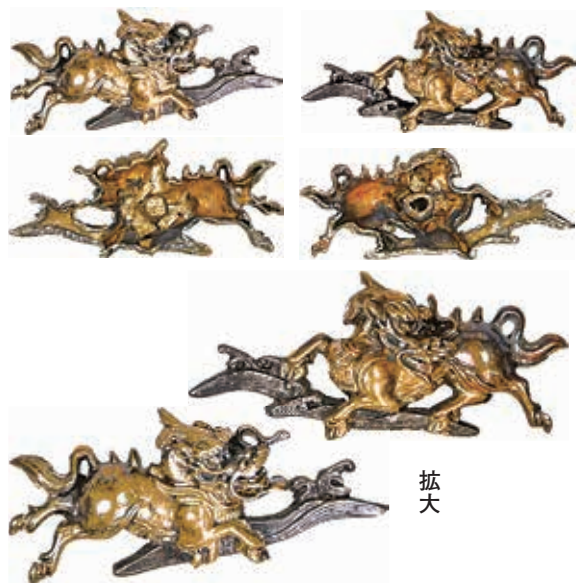
目貫 無銘 光乗

波に麒麟図 金無垢・銀無垢地 容彫 裏・陰陽根 麒麟を金無垢で圧しへし深く鮮やかに彫り、下の波は銀無垢で両者を芋継ぎにするたいへん凝った目貫。麒麟は中国発祥の瑞獣。世の中が平和な時、聖王の治世に出現するといふ。形は鹿に似、顔が龍に似て、蹄は馬、尾は牛に似る。一本の角を持ち、背毛は五彩で、腹は黄色であるという。

無銘であるが保存証で後藤宗家四代・光乗に極められた。光乗は三代・乗真の嫡男で享禄二年生。織田信長に彫金と財政の業務で登用され大判と分銅の製作をする。信長の死後、豊臣秀吉の依頼で大判・分銅役を勤める。長男の徳乗と共に豊臣家の財政面の重要な職務を担当する。また初代祐乗の名を高めたのも、この人の功績という。

本作は角が立ち、圧しの高さがあり、裏は陰陽根で、ただ物ではない雰囲気醸す品格ある目貫である。桃山。保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り (帙付き) 三二万(32)円



拡大

目貫 無銘 古美濃

海老図 金無垢地 容彫

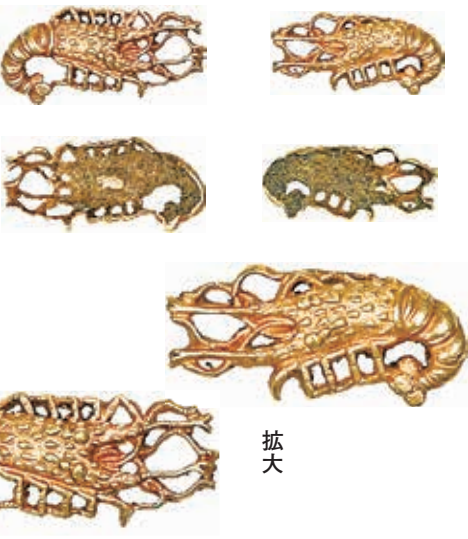
きれいな金無垢地に伊勢海老を彫る。円筒形の頭胸甲の多くの棘を一つ一つ丁寧に高彫し、頭胸部の五対の歩脚は節を毛彫する。二対の触覚と額触は節々を彫り、七節の腹部、平たい尾など細部まで緻密である。

古美濃とは、室町時代から安土桃山時代にかけて美濃地方で製作した集団と作品を指す。古美濃彫は赤銅や金の地がねを中心にしており、彫りの腰が立体的に高く立ち上がって、山谷の高低差がついた力強い彫り口に特徴があるとされている。

伊勢海老は祝儀用などの席に、また丸まった背を老人にたとえて長寿の象徴となる。本作はやや小ぶり薄手であるが金性が実によく、透し穴も多くあり、彫りの深さと線の強さを際立たせる。安土桃山。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 二八(28)万円



拡大

日本刀「現存の優品」

(100)

令和7年9月25日発行

発行所／(株)刀剣柴田

〒104-0061
東京都中央区銀座5-6-9
電話番号／03-3573-2801

FAX 03-3573-2804

〒104-0061

東京都中央区銀座5-6-9(1階と地下)
(旧店の5-6-8の最後の「8」が「9」になりました。)

銀座刀剣柴田

電話 03 (3573) 2801・Fax 03 (3573) 2804



1階の内部



地下の展示室



すずらん通りから見た新店舗1階の外観

**移転しています。
新店オープン！**

3軒となりに引越しました。
旧ビル建替えのため10m先の(1階・地階)
に新装開店しています。
新しい店は気持ちよいです。即売会にお
越してください。

共柄小刀 ともがかりこがたな 於備前国義光作 よしみつ 八十一叟仙琇彫之

見返り龍圖 小刀の穂長一三・五cm 小柄長九・四cm 両者含めての全長二三cm

人気の現代刀匠・大野義光師と刀剣彫物の名手であつた故・苔口仙琇師合作の共柄小刀。小刀には義光師の鑿深い七字銘が入り、明るくピリツとした雰囲気で、地鉄は小板目つんでやや杵がかり、刃文は濤瀾風の交互ノ目、沸よくついて匂い深く、刃縁・刃中にこまかい砂流し盛んにかかる。帽子の焼きはとも深く先小丸。小柄は鉄石目地に見返り龍を彫。彫り高くウロコが立ち迫力満点。金地でも赤銅地にでもなく鉄地に彫っているわけで、その硬さに負けぬ鑿の斬れ味のよさである。

義光師は昭和23年、新潟県生まれ。大学を卒業後、東京・高砂の吉原義人師に入門した。昭和の末年、国宝・山鳥毛写しを発表して斯界を驚かせ、高松宮賞を毎年連続して獲得。無鑑査に推され、その後、山鳥毛の義光師として名声を馳せる。今年二月には、鍛刀50周年を記念して日本橋・三越本店で初の個展が開かれ、好評であつた。

苔口師は昭和から平成にかけての刀身彫刻の第一人者であつたが、金工師の一面も持っていた。鐔はともかく小柄の作品はよく見かけた。岡山県出身の

大正11年生まれ。腕は抜きんでよく、故・隅谷師の作品の他たくさんの刀に彫りをした。平成23年12月89歳没。弟子に岡山の柳村仙寿、また埼玉の橋本琇巴がおられたが両氏とも亡くなられた。

本作は大野師を応援する苔口師が大野氏に共柄小刀を依頼して製作した数点のうちのひとつ。共柄小刀とは小刀・小柄を別々に作って差し込むわけではない。鉄一体で作り上げる。その焼入れは実に難しいと聞く。またそこに小柄を形成するのであるから：今回も、苔口師の龍は実にうまい。現代。

白鞘のサック入り

六〇(60)万円



原寸大